

「若手研究者支援」海外調査	
作曲家アール・ブラウンの作曲手法に関する資料調査	
氏名 藤井 愛子	比較社会文化学専攻 博士後期課程 3年
期間	2024年6月16日～2024年6月23日
場所	スイス、バーゼル
施設	パウル・ザッハー財団

1. 研究目的と海外調査研究の必要性

報告者の研究では、作曲家アール・ブラウン BROWN, Earle (1926-2002) の1950年代及び1960年代の音楽作品の作曲手法及びその思想について明らかにすることを目的としている。

ブラウンは20世紀のアメリカ実験音楽の文脈において重要な作曲家として考えられてきたが、当時から最も著名な作品《December 1952》(1952)の記譜とその演奏へ注目が集まる状況¹により、その理解には誤解や偏りが生じている。近年では、ブラウンの作品や思想について再評価を行う研究が増加しているが、生涯にわたり作曲された47の作品に対する詳細な分析研究は依然として積極的になされていない状況である²。

報告者は、以上の研究状況を打開し、作曲手法を実証的に解明する分析研究を行うことにより、作品という側面からブラウンの思想を明らかにしたいと考えている。そのため、博士論文の第二章及び第三章では、一次資料を使用した分析とその結果を取り扱う予定である。こうした必然性を持つ調査として、今回の海外調査研究を行った。

2. 資料調査について

2-1 調査の目的と方法

海外調査研究の目的は、対象作品の分析研究を行うために必要なブラウンのメモやスケッチ等の一次資料を閲覧、複写することである。ブラウンの資料は、ニューヨーク所在アール・ブラウン音楽財団から2017年にバーゼル所在のパウル・ザッハー財団へ移設された。現在はデジタル化された資料をパウル・ザッハー財団内で閲覧可能であり、手書き複写のみ可能である。今回の調査では、研究対象としている5作品に関係する資料の手書き複写を行った。

2-2 調査結果

資料はファイルごとに整理されているが、その内容や資料数は直接訪問でしか情報を得ることができなかった。今回調査を行い、資料の全体数や種類などの基本情報を得るとともに、資料整理についての研究課題も同時に考える機会を得ることができた。

また、調査対象とした作品以外の資料調査も行うことができたが、作品が不明な資料も多く、今後の調査と分析が必要であると考えている。

3. 今後の展望

今回の調査で、ブラウンの分析に必要なメモやスケッチが得られただけでなく、ブラウンの思想を直筆やメモから感じ取ることができ、論文の方向性についての示唆を得ることができたことは大きな収穫であったと考える。

今後、調査で得た資料から作品の分析研究を行う予定であり、その成果を来年度の日本音楽学会での口頭発表及び、お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢への論文投稿という形で発表する予定である。最終的には報告者の博士論文で全ての資料が使用され、その成果が公表される予定である。

今回、国際的に活躍する女性リーダーの育成に関わるプログラムにご支援いただき、調査が実現したことは、女性研究者を目指す自身にとって大変貴重な機会であった。20世紀の現代音楽分野において

リーダー的存在になれるよう邁進していきたい。

注

1. DENTON (1992) は、当時の記譜への注目と演奏の状況について説明している。RYAN (2017)は、《December 1952》(1952) が当時の現代音楽シーンを注目させるポスター等で取り上げられる機会が増えた一方で、ブラウンの追求した概念とは異なった見方をされることが増えた点を指摘する。
2. 一次資料を用いた最新の分析研究として、KIM (2017) や PINE (2017) が挙げられる。

参考文献

- 青嶋 絢 (2019) 「「開かれた形式」 コンセプトの探求と記譜の実験—アール・ブラウン Folio を中心に—」『フィロカリア 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座 編 (36)』, 25-51.
- BROWN, Earle. (1965) “Form in New Music”, *Darmstädter Beiträge zur Neuen Musik* 10, 57-69. Rpt. As “On Form” in *Source: Music of the Avant-Garde 1, no.1 (January 1967): 49-51*. Rpt. in *Source: Music of the Avant-Garde, 1966-1973*, edited by Larry Austin and Douglas Kahn, (Berkeley, University of California Press, 2011), 24-34.
- CADY, Jason. (2017) “An Overview of Earle Brown’s Techniques and Media”, KIM, Rebecca Y. (ed.), *Beyond Notation: The Music of Earle Brown, United States of America*, University of Michigan Press, 1-20.
- DENTON, B. David. (1992) *The composition as aesthetic polemic: “December 1952” by Earle Brown*, The University of Iowa
- KIM, Y. Rebecca. (2017) “Four Musicians at Work and Earle Brown’s *Indices*”, KIM, Rebecca Y. (ed.), *Beyond Notation: The Music of Earle Brown, United States of America*, University of Michigan Press, 113-141.
- PINE, Louis. (2017) “Earle Brown’s Study and Use of the Schillinger System of Musical Composition”, KIM, Rebecca Y. (ed.), *Beyond Notation: The Music of Earle Brown, United States of America*, University of Michigan Press, 27-79.
- QUIST, L. Pamela. (1984) *Indeterminate Form in the Work of Earle Brown*, Peabody Institute of The Johns Hopkins University
- WELSH, P. John. (1967) “Open Form and Earle Brown’s Module I and II”, *Perspectives of New Music*, Vol. 32, No. 1 (Winter, 1994), 254-290.

ふじい あいこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

Survey of materials related to composer Earle Brown’s compositional techniques
Aiko FUJII

指導教員のコメント

藤井愛子氏は、今回の若手研究者支援（海外調査）のご支援により、博士論文の研究「作曲家アール・ブラウンの1950年代及び1960年代の創作プロセスと思想」を進めるにあたって欠かせない、パウル・ザッハー財団（スイス、バーゼル）での自筆資料調査に着手することができました。藤井氏は、当財団を直接訪問しなければ閲覧できない、ブラウン直筆の楽譜や構想メモ、スケッチなどの重要な基礎資料を確認する作業を通して、一次資料の状態への知見を得るとともに、作品分析の中核となる作曲思想等についても収穫を得ることができました。指導教員として、本調査経験が今後の博士論文作成に結実していくことを大いに期待しているところです。

比較社会文化学専攻表象芸術論領域 教授 井上登喜子